

## 「2022年度タイ・チュラーロンコーン大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 繁田 晴章

今回の派遣はただタイのチュラーロンコーン大学で学んだにとどまらず、海外で学ぶということ、海外で生活し、現地の人と関わること、そして自他の相互理解をすることなどについて考える機会となった。もっと海外に出ていきたい、いろいろな人と関わってみたい、違う環境に身を置いてみたいという気持ちが湧いてくるような研修であった。

今回の派遣を通して、まず何よりも海外で学ぶことの楽しさを感じた。日本での日常から離れ、新たな環境に身をおいた日々はとても刺激的で新鮮な日々であった。そのような中で日本語ではない言語で講義を受け、学習内容が身についていくという経験は、自分自身のこれからの学習や海外経験をすることで少し自信につながるようなものであるように思われる。これまでは、海外留学といえば、かなりハードルの高いものであるイメージであったが、今回2週間という短い時間ではあったが海外に身を置き、学習に取り組んだことでそのハードルの高さが少し下がったと感じる。また、現地で受けた講義の中で感じたこととは、日本で身につけた知識が海外で日本語でない言語の講義を受ける際に大変役立つということである。より多くの知識を持っていればそれだけ自信を持って海外で学ぶことができると思う。だからこそ、日本での学習が今にもまして重要であるように思われるようになった。今回のプログラムでは、主にタイ語の学習とタイの文化の学習、そしてタイの学生との共同発表が行われたが、タイ語学習やタイ文化というのは現地で初めて学習したようなことも多く、このような経験をできたことは自身の財産になった。

また、国際理解という観点では今回の派遣を通して、より多くの国、人との交流を通して国際理解を深めたいと感じるようになった。タイの文化には日本と違った文化も多く見られたが、それらがどう違うのか、なぜ違うのかなどということまでさらに知りたいと感じるようになった。また一方で、タイの宗教観などには少し日本のそれと似たようなところもあり、タイは敬虔な仏教国であると思っていたが、そのような一言では説明しきれない側面や多様性を持ち合わせており、良い意味で自身の期待を裏切られとても興味深いと感じた。国際理解を深めるためには現地の人と関わるということに越したことはないように思われた。それは、そばに同じ人間であるが異なる文化の中で育った人がいるからこそ強くそう思えるのではないだろうか。そのためにも、より多くの人と関わり、自分が知らない文化についてもっと理解したいと思えるようになった。タイの学生や、現地の方と交流することができたからこそ一人では気づくことができなかつたことにも気づくことができた。しかしながら、今回の2週間の滞在では、やはり主にはタイのポジティブな側面だけを捉えたに過ぎないのかもしれない、まだまだ多くを理解するには至っていないようにも思われる。

これらのことを踏まえ、今回の派遣を通して、真剣に海外に留学してみたいと考えるようになった。半年や1年といった長い時間、海外に身を置き、そこで学習に励むことで語学力の向上、研究だけにとどまらず、新たな文化との出会い、いまだ知らない文化の理解を得たいと強く思うようになった。また、それは留学という形にとどまらず、例えば海外に進出している企業や海外の企業に就職するというように海外で生活するという選択肢も魅力的に感じるようになった。よりグローバルに、よりボーダレスに生きていけるようになりたいと強く思うようになった。